

第2回

暮らしの中にある音や音楽 ～音楽ワークショップ（1）～

学習のねらい

今回は、私たちの生活や社会の中にあるさまざまな「音」や「音楽」に耳を傾け、人間にとっての「音」や「音楽」の存在意義などを考えていきます。また最近では、手軽に音楽や映像をダウンロードして楽しむことができるようになりました。著作権についても関心を持って、著作者の権利を守っていく姿勢を身に付けましょう。



講師
末石 忠史

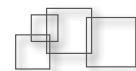
生活や社会の中にあるさまざまな音や音楽に耳を傾ける

「キ～ン コ～ン カ～ン コ～ン」と鳴り響く学校のチャイム。これはもともとイギリスのロンドンにある国会議事堂の時計塔「ビッグベン」のメロディーだそうです。多くの学校や職場でも始業や終業のチャイムとして使われている「音」なのではないでしょうか。皆さんのまわりにはどんな「音」や「音楽」がありますか。番組で流れるいろいろな音楽を聞き、どんな時に、どこで聞いたのか思い出してみてください。

実際にそれらの音楽を聞いてみると、多種多様な音楽に囲まれて、私たちは暮らしていると気づかされます。次に自然界の「音」にも耳を傾けてみましょう。番組で紹介する「花火」や「お寺の梵鐘」の音も時に私たちを楽しませたり、癒したりします。このように、いろいろな場所で耳を澄ませてみると、自然のありさまや、その地域の人々の暮らしぶりを感じることができて、新しい発見があるかもしれません。

人間にとって「音」や「音楽」の存在意義などを考える

ここではドヴォルジャーク作曲の交響曲第9番「新世界から」の第2楽章のメロディーで考えます。日本では「家路」というタイトルで親しまれていますが、このタイトル通り郷愁を誘うメロディーです。この特徴的なメロディーにはドヴォルジャークの故郷をなつかしむ気持ちが反映されているかもしれません。また、冒頭のメロディーが特徴的な「四七抜き」と呼ばれる音階で作られています。





この四七抜き音階の音楽はいろいろな国にあり、さまざまな国の人が共通して、ふるさとのイメージをもったり、懐かしさを感じたりしているようです。そのため現代の私たちの社会では、「家に帰るように促す音楽」として使われているのです。このようにさまざまな音楽を聴いてみると、どの音楽も特徴的で、その場の雰囲気を演出したり、私たちに何かを思い起こさせたり、行動を促したりしている、ということに気づきます。

音楽・楽曲とは、個人の思いや感情を、音の高さや長さ、音色、強弱、リズム、形式などの、音楽の構成要素を使って表現したものです。そうして生まれた音楽作品は、作曲された時点から歴史的、文化的な影響を受け、さらに育てられ、あるいはどう汰される中で次の世代へと受け継がれていきます。音楽の奥深さの一つは、こういった歴史的な積み重ねからうまれているのかもしれない。

音楽の著作権について考え、その意味を知る

なぜ著作権という法律が必要なのでしょう？ 音楽を作っている人たちは、商品を作るための原材料費だけでなく、人件費、開発費、広告費などさまざまな費用を負担して創作しています。それらに見合った対価や利益を得られなければ、創作活動を続けることが難しくなります。また、作品を他者によって勝手に作り変えられたり、ニセモノが流通してしまったりしたら、作品を作った人たちの活動や生活が脅かされる恐れがあります。その結果、私たちも、新しい作品や、より価値の高い作品に出会う機会を失うことになりかねません。

これは誰にとっても不幸なことです。そのため、こういった著作物を作った人たちの権利は著作権法という法律で保護されています。皆さんも著作権についてよく知って、作品を楽しんでください。

👉 one point

著作権……著作権の原則的保護期間は、著作者が著作物を創作した時点から著作者の死後70年までです。そのほか例外的保護期間もあります。